

令和元年度第 1 回ハタハタ資源対策協議会資料

表 1 秋田県における漁獲枠と漁獲実績の推移

年	沖合			沿岸			合計		
	漁獲枠	漁獲量	実績(%)	漁獲枠	漁獲量	実績(%)	漁獲枠	漁獲量	実績(%)
平成 7年	85	54	63	85	89	104	170	143	84
8年	110	86	78	110	157	143	220	243	111
9年	180	148	82	180	280	155	360	428	119
10年	300	162	54	300	438	146	600	599	100
11年	400	142	36	600	580	97	1,000	722	72
12年	400	265	66	600	902	150	1,000	1,166	117
13年	520	506	97	780	986	126	1,300	1,493	115
14年	680	384	57	1,020	1,570	154	1,700	1,954	115
15年	960	907	94	1,440	2,051	142	2,400	2,958	123
16年	1,000	707	71	1,500	2,349	157	2,500	3,055	122
17年	1,000	489	49	1,500	1,867	124	2,500	2,356	94
18年	800	944	118	1,200	1,640	137	2,000	2,584	129
19年	720	847	118	1,080	765	71	1,800	1,612	90
20年	1,200	868	72	1,800	2,035	113	3,000	2,903	97
21年	1,040	1,054	101	1,560	1,475	95	2,600	2,530	97
22年	960	457	48	1,440	1,277	89	2,400	1,734	72
23年	1,120	677	60	1,680	1,287	77	2,800	1,964	70
24年	1,080	376	35	1,620	931	57	2,700	1,307	48
25年	768	624	81	1,152	898	78	1,920	1,522	79
26年	672	285	42	1,008	940	93	1,680	1,225	73
27年	320	438	137	480	686	143	800	1,124	141
28年	320	450	141	480	393	82	800	844	105
29年	290	241	83	430	240	56	720	481	67
30年	320	325	102	480	287	60	800	612	77

※平成9年以降は、沖合は管理漁期(9月～翌6月)、沿岸は漁期(11月～翌1月)の合計値（水産漁港課調べ）

◎H30 年漁期の配分枠に対する実績は、沖合 102%、沿岸 60%、全体で 77%であった。

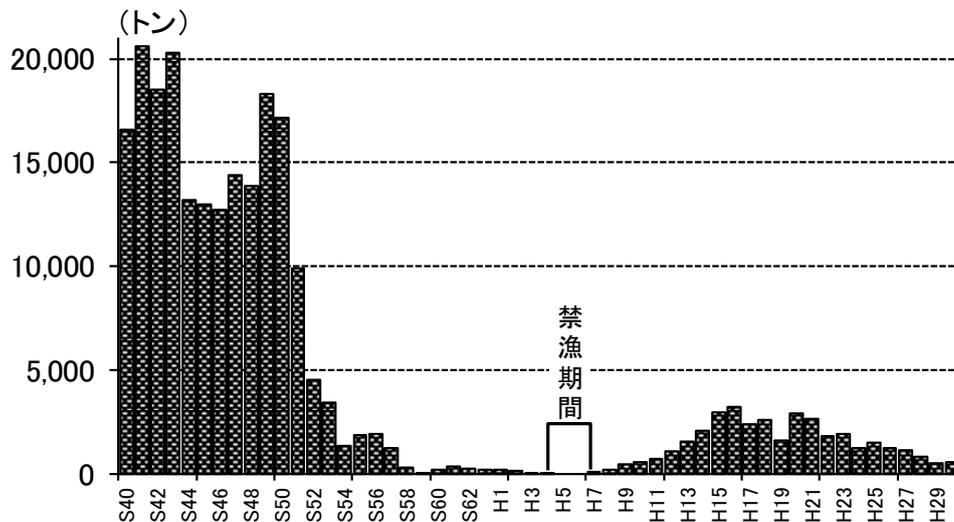


図 1 秋田県におけるハタハタ漁獲量の推移

(1-12月漁獲量: H29年までは農林水産統計、H30年は水産漁港課調べ)

◎H30 年 1～12 月の本県漁獲量は 597 トンで、前年に比べて 70 トン増加した。

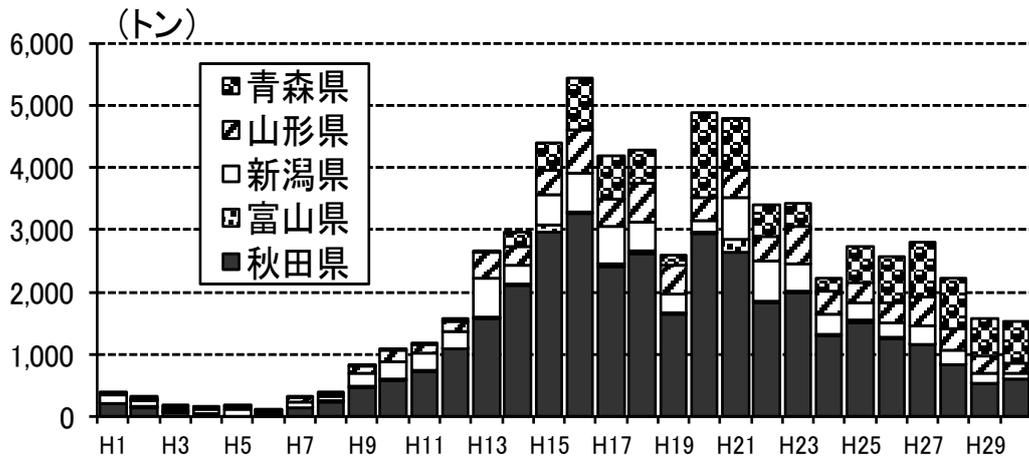


図2 日本海北部5県における漁獲量の推移 (H30年は日本海区水産研究所調べ)

- ◎ H30年の5県漁獲量は1,522トンで、前年より56トン減少した。
- ◎ このうち秋田県の割合は39%で、前年に比べ6ポイント上昇した。
- ◎ 県別では、秋田597トン（前年比113%）、青森655トン（同108%）、山形181トン（同66%）、新潟85トン（同52%）、富山4トン（同40%）であった。

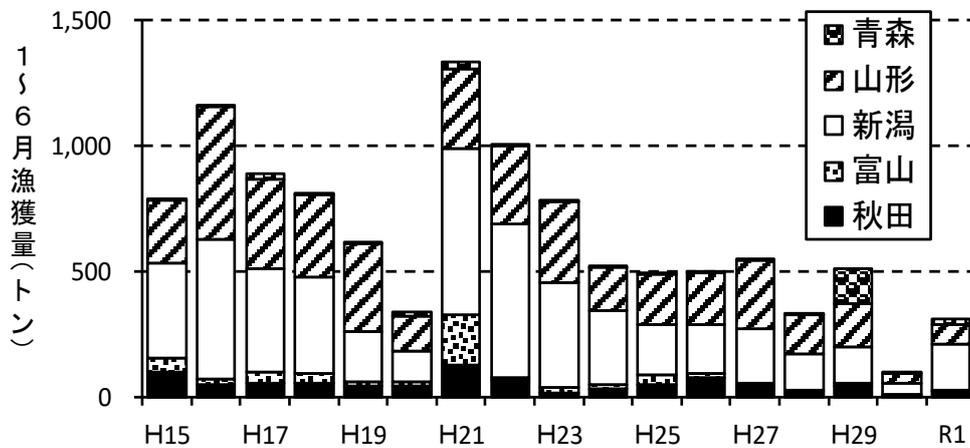


図3 1～6月における日本海北部5県のハタハタ漁獲量
(H30年まで日本海区水産研究所調べ、R1年は各県の漁海況情報から集計)

- ◎ 本年1～6月の日本海北部の漁獲量は311トンで、前年の336%であった。
- ◎ 各県の漁獲量は、秋田20トン（前年比417%）、青森24トン（同8,988%）、山形78トン（同203%）、新潟183トン（同400%）、富山7トン（同173%）であった。

●底びき網での調査結果（成魚：11-12月）

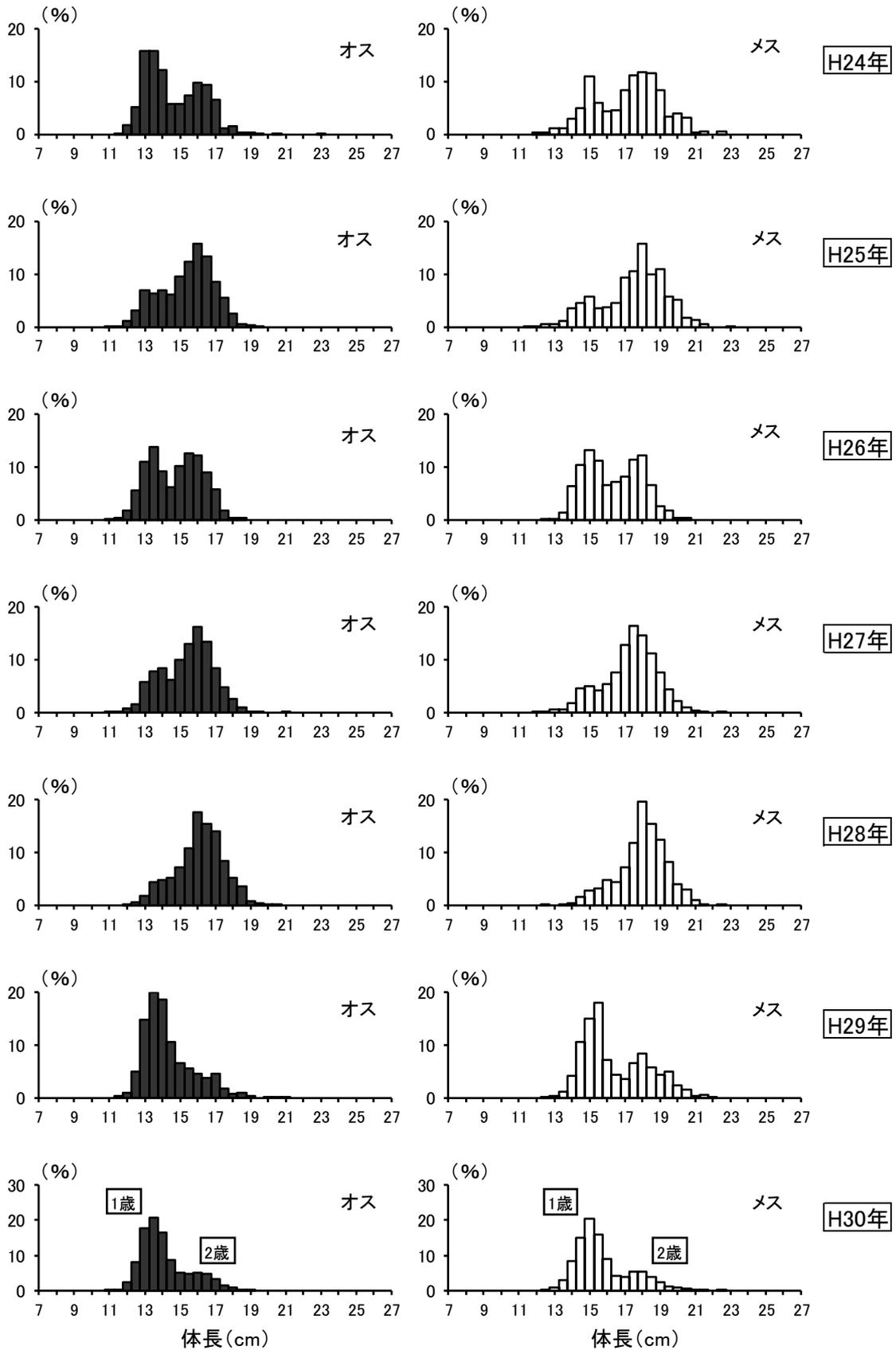


図4 11、12月におけるハタハタ体長組成(H24-30)

【昨年の傾向】

- ◎ 漁獲の中心はH29年生まれ（1歳）であり、漁獲量は低調であった。
- ◎ 2歳は少なく、3歳以上もかなり少なかった。

●底びき網での調査結果（成魚：4-5月）

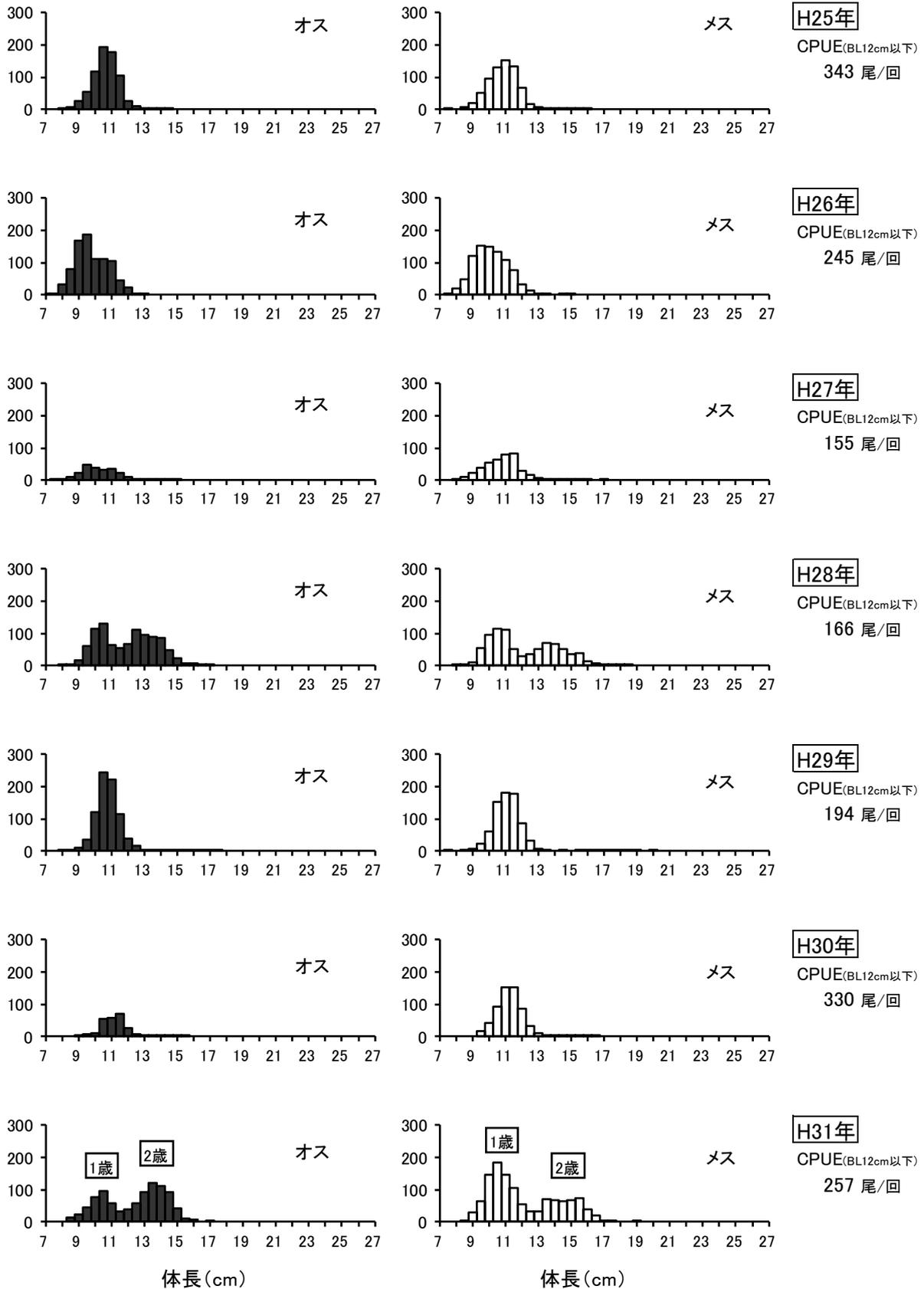


図5 4、5月におけるハタハタ体長組成（H25-31；水深250m以浅）

【今年の傾向】

- ◎ 今期漁獲される1歳魚の資源量の参考となる水深250m以浅の4、5月の分布量は、昨年よりもやや少なかった。また、2歳魚の分布割合が高かった。

●調査船での調査結果（成魚：9-10月）

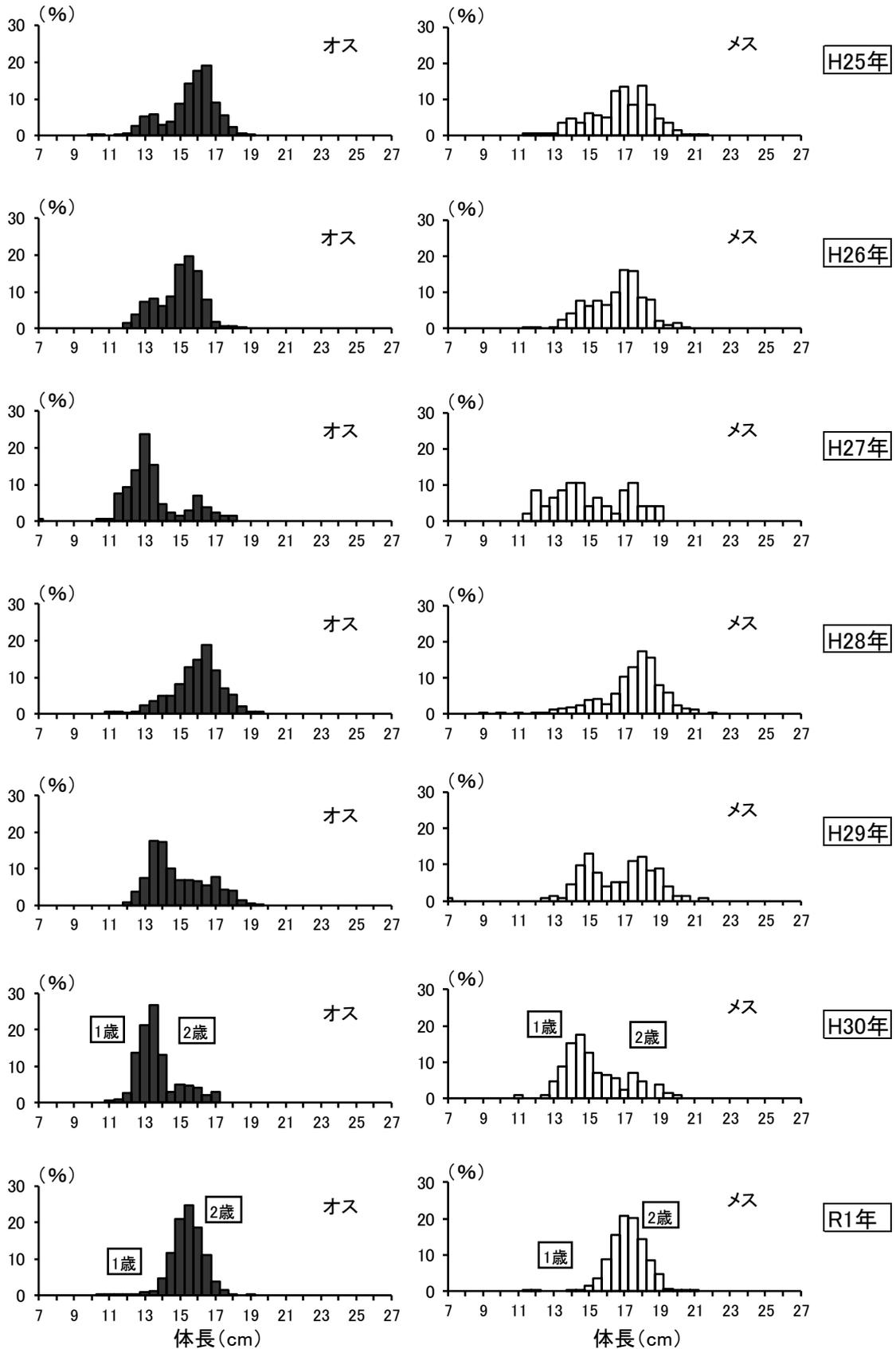


図6 9、10月におけるハタハタ体長組成(H25-R1;水深200m以深)
(千秋丸+民間船データ)

【今年の傾向】

◎ 現状ではオス、メスともに2歳（H29生まれ）の割合が高く、1歳の割合は現段階では低い。

●底びき網での漁獲状況（9月以降）

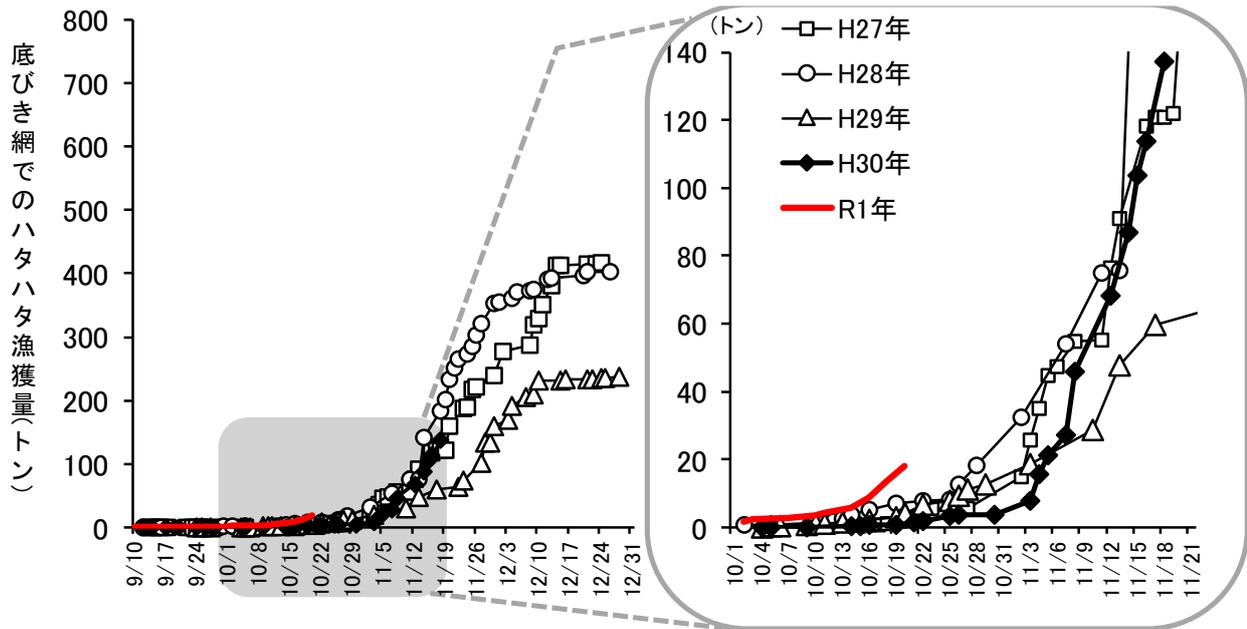


図7 底びき網でのハタハタ漁獲量の推移(累積値;秋田県漁協調べ)

◎今漁期の10月20日までの漁獲量は約18トンで、昨年同期の約1トンを大幅に上回っている。

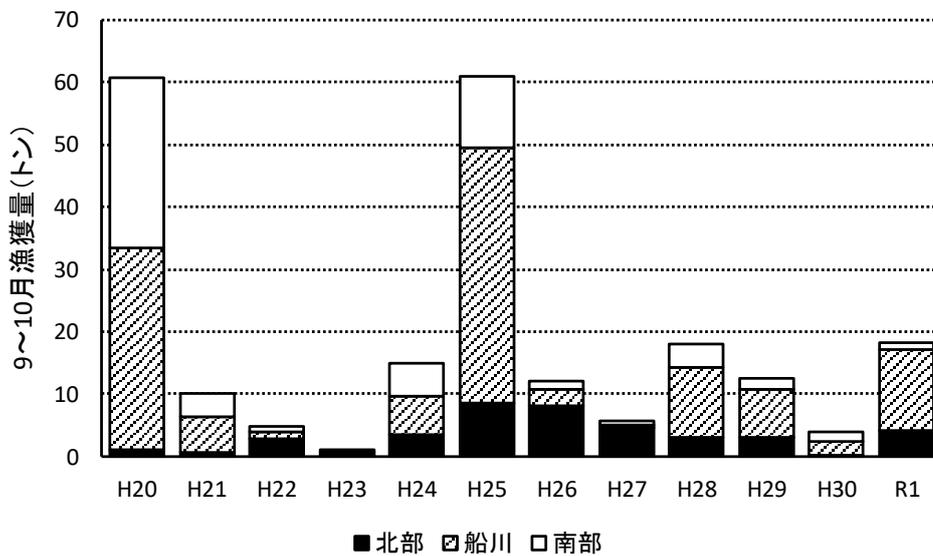


図8 底びき網での地区別漁獲量(9~10月)
※R1年は10/20までの値

◎今期の10月20日までの地区別漁獲量は、北部地区4トン（昨年10月末比1,628%）、船川地区13トン（同620%）、南部地区1トン（67%）であった。

令和元年漁期のハタハタ資源量と将来予測

- ◎ 昨年漁期よりも 2 歳魚の資源尾数は多いことが期待できるが、資源水準は依然として低いと推測する。
- ◎ 今後の本県漁獲量の推移を将来シミュレーションで推定したところ、資源を維持するためには、今期の漁獲量を約 650 トン（図 9：➡）に抑えることが望ましい。

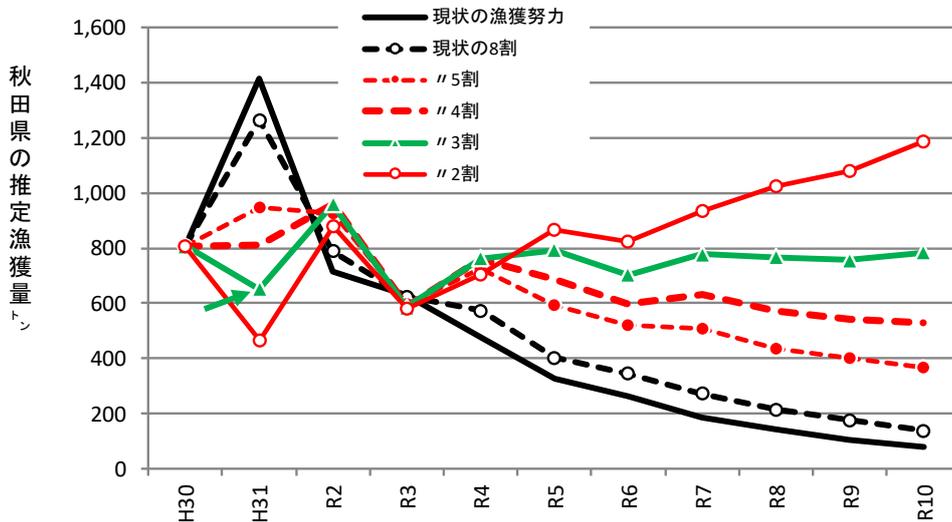


図9 ハタハタ資源に対する漁獲努力(獲り方の指標値)と本県漁獲量の推移

〈図の見方〉

漁獲努力とは、操業隻数や操業日数を反映した指標値であり、水産資源の解析では広く用いられている。

なお、H30 年漁獲量は未報告漁獲量を含めた推定値であるため、図 1 の値とは一致しない。

- ・現状の漁獲努力: 直近 3 年の平均的な漁獲努力で操業を続けた場合の漁獲量の推移
- ・現状の 8 割 : 現状の漁獲努力の 8 割(2 割削減)で操業を続けた場合の漁獲量の推移

⇒漁獲努力を削減すると、この図では R4 年漁期以降の漁獲量に差が生じ、削減幅が大きいほど漁獲量が多くなる
ことが期待できる。

R 元年漁期の秋田県目標漁獲量：650 トン

- ・ 今漁期の魚体は 2 歳（中型）が中心で 1 歳（小型）も混じり、3 歳以上（大型）は少ない。
- ・ 減少した資源の維持、増大を図るには、獲り残しを増やすことが重要である。

—提案—

- ・ 資源が低迷して漁獲枠が縮小傾向にあり、また漁業者の高齢化や人員不足により作業負担が増加している現状では、漁獲努力量の削減による漁業管理がより有効だと考える。
 - 共同操業の導入：ハタハタ漁場での操業回数縮減（沖合）、設置統数の縮減（沿岸）
 - 操業日数・時間の短縮
 - 目合拡大による小型魚の漁獲回避
 - ⇒漁労作業の軽減、今年の産卵量と来年以降の資源を確保
- ・ 漁協へ漁獲物を全量出荷し、無駄なく売り切り収益を確保する。未報告漁獲量を無くす。